

氏名・(本籍地) 工藤量導(青森県)  
学位の種類 博士(仏教学)  
学位記の番号 甲第74号  
学位授与の日付 平成23年3月15日  
学位論文題目 迦才『浄土論』の研究  
論文審査委員 主査 廣川堯敏  
副査 小澤憲珠  
副査 春本秀雄

## 工藤量導氏 学位請求論文審査報告書

### 「迦才『浄土論』の研究」

#### 論文の内容の要旨

本論文は「迦才『浄土論』の研究」と題され、唐代初期の長安の弘法寺で活躍したとされる迦才の著書『浄土論』における浄土教思想とその成立背景の解明を目的としたものである。目次は計五章で構成されている。

迦才『浄土論』は、中国では早くに散佚して伝わらず、日本では南都や叡山系の浄土教家の間で重用されていたが、法然以後は一転して中国浄土五祖などよばれる道綽・善導の系統が中心となり、迦才の思想研究は近代まであまり進まなかった。昭和三〇年に刊行された名畑順氏による『迦才浄土論の研究』は唯一の専著であり、以降の研究は名畑氏の成果に負うところが大きい。

序論では、先行研究の整理・分析を行い、迦才の浄土教思想を、名畑氏の研究も含む従来のような道綽・善導との比較による伝統的な評価軸から解放し、これまで消極的な評価が下されてきた凡夫化土往生説を起点に設定して、隋唐代における浄土教の思想史的な流れを十分に吟味したうえで、道綽や善導による凡夫の報土往生説とは別の思想的文脈から、迦才独自の化土往生説が生じた経緯を明らかにするという方法論を提示している。

次に各章において注目すべき点として、第一章「『浄土論』の成立背景」では、吉蔵、道世、嘉尚が弘法寺に止住していたことを指摘するとともに、多数の地論・撰論学系の学僧が弘法寺に往来していたことを明らかにし、『浄土論』はそのような環境下で著された書物であると論じている。また、これまで定説とされてきた道綽と迦才の師事関係について疑問を呈し、おそら

く両者に面授の事実はないこと、さらに両者が引用する経論や共有する問題についても、従来考えられていたよりも親密ではなく、迦才への影響力は末法観の受容などの一面的なものにとどまるとの見解を提示している。いずれも、従来の研究にはみられない指摘であり、事蹟が不明とされてきた迦才における歴史面での研究成果でもある。

第二章「迦才における凡夫と聖人」では、迦才の特徴的な凡夫論である本為凡夫兼為聖人説が、末法観にもとづいて、四十八願を凡夫の願と聖人の願に分類するという独特の本願論との深い結びつきのなかで形成されていた点や、その凡夫論にもとづいて慧遠の九品説の批判を行ったことを明らかにしている。とくに迦才の本願論が、道綽や善導の本願念仏の思想と異なる問題意識のもとで、独自の展開をみせていることはこれまで注目されておらず、新たな視点である。

第三章「実践行に対する批判とその克服」では、当時の浄土教への難説として、撰論学派による往生別時意説を挙げ、その批判に対応した実践行体系が形成されていたことを明らかにしている。従来は、迦才に本願念仏の思想がみられないことが消極的に評価されてきたが、実はその思想は別時意説など時代の要請に即応して、『往生論』の五念門をモデルとしながら、その内容を換骨奪胎し、了義経である十二経七論、すなわち經典にもとづく在家者の中下根行と、論書にもとづく出家者の上根行という凡夫の化土往生を目的とする二層的な行体系が構築されていたとの主張は、本研究による新たな視点である。

第四章「西方化土説の思想構造」では、迦才の仏土

説が撰論学派の四土説に由来すること、また西方浄土を長時かつ清浄とする長時化土説を主張していたこと、さらに別時意説への牽制という側面も含意して、報土と化土の両方に通じる通報化土説を提示し、「往生→見土」という独自の西方浄土観があらわされたことを論じている。とくに、これらの独自の教義が案出された思想背景に、真諦訳『撰大乘論』世親釈および『大乘起信論』の教理研究の進展、具体的には地論・撰論系の学僧による議論内容が大きく関与しているとの指摘はこれまでにみられないものであり、本研究の綿密な整理によって、隋唐代の仏身仏土論の思想展開上における迦才の位置づけが明確にされたといえる。

第五章「西方浄土に関する諸問題」では、従来ほとんど浄土教の問題としては着眼されなかった分段変易の二種生死説、封疆説、種子欲・上心欲について、慧遠や吉蔵や敦煌本『撰大乘論釈』注疏など同時代の諸文献との接点を指摘し、さらに迦才の特徴的な教説である処不退説の内実を明らかにしている。とくに処不退説を多角的に考察することを通じて、道綽・善導あるいは慧遠・吉蔵のいずれとも異なる、迦才における化土往生説の思想的意義が明確にされたとの論述は、従来の研究には見られない指摘である。

結論では、各章の考察を総合して、『浄土論』の撰述経緯と思想の形成過程、ならびに迦才と同時代における凡入報土説の成立しがたさという問題点について述べている。とくに『浄土論』という書物が、道綽『安楽集』の祖述顕彰を目的としていないこと、ならびに吉蔵や地論・撰論学系の浄土教に関する議論を多分に取り入れた懐柔的な性格を有していることを強調し、さらに道綽の報土往生説から迦才の化土往生説への流れは単に思想的な後退ではなく、撰論研究等の高まりに同調してあらわれた迦才独自の思想展開であったと位置づけた点は、本論文を通じてなされた重要な主張である。また課題として、近年、続々と整理が進みつつある地論・撰論系の文献との接点を見出してゆくことの必要性を指摘している。本論文は、長らく進展をみせなかった迦才研究に一石を投じるものであり、かつ迦才の浄土教思想の全体像を、道綽や善導などの流れとは異なる、隋唐代の思想史的な視点からとらえた意欲的な研究論文である。

## 審査結果の要旨

### [本論文の評価]

本論文の評価すべき点は、迦才の浄土思想の背景として、同じ隨・唐代の他の諸宗諸師（とくに地論・撰

論学派）の著作との教学的な接点を徹底的に追究し、その思想史的な位置づけを目指した点にある。とくに従来、中国浄土教の正統派を曇鸞・道綽・善導等の三師とし、それ以外の浄土教者を一段低く評価する傾向が強い。これに対して本論文の筆者は迦才を、道綽・善導を正統とする視点から独立させ、ひとりの完結した浄土教者迦才の全貌を解明しようとしている。このような方法論は中国浄土教研究の新たな分野を開くものとして高く評価することができる。

具体的には、まず第一章では、迦才の住した弘法寺をめぐる修学環境、および道綽との師事関係の有無を問題とする。弘法寺をめぐる吉蔵・道世・嘉正の在寺時期、および法常・玄琬・智儼の弘法寺との往来の事実の指摘等は従来注目されてこなかった点である。また通説であった道綽との師事関係に疑問を呈し、『安楽集』と『浄土論』両書の引用経論を比較し、両書に親密さは認められないと結論づけている。

さらに第二章以降に展開する教義上の諸問題に対しても、今までにない独創的な解釈を展開している。すなわち、第二章凡夫観では迦才の本為凡夫兼為聖人説が弥陀の本願観にもとづくことを指摘している。第三章実践の論述では撰論学派の別時意説に対抗して、上根と中下根の二層の実践体系を創設したと指摘する。第四章西方化土説の思想構造では、迦才の仏土説が撰論学派の四土説に由来すること、また西方浄土を長時かつ清浄とする長時化土説を主張していたこと、さらに報土と化土の両方を通ずる通報化土説の形成によって、迦才独自の西方浄土観が提示されていたことを明らかにしている。これらを体系的に論及したことははじめてである。第五章西方浄土に関する諸問題では、従来まったく注目されてこなかった分段・変易の二種生死説、封疆説、種子説、上心欲等について同時代の諸文献との接点を指摘し、迦才の独創説である処不退説の内実を明らかにしている。これら迦才の特徴的な化土往生説の思想的意義について解明した論述は、従来まったくなされてこなかったといえよう。

本論文は伝統的な道綽・善導流の視点から離れて、隨・唐代の新たな思想的視点から迦才の浄土教思想の全体像を解明した研究論文である。ここに指摘した内容の一端は、今後の迦才研究、および中国唐代浄土教研究に大きな方向性を与えるものである。

### [本論文の課題]

以上のように種々評価する点がある一方、今後の課題も残されている。まずテキストの問題であるが、『浄

土論』の底本はやはり浄全本よりも、名畑応順校訂本（名畑応順『迦才浄土論の研究』所収本）によるべきであろう。

第一章では迦才が想定したと推測できる対論者として、地論・摂論系の学僧に注目しているが、その地論・摂論宗南道派の諸文献が近年敦煌より出土している。それらの新資料の探索が求められよう。

第四章、第五章で論述する迦才の化土往生説は多くの問題点が含まれている。迦才の化土往生説について、かつて望月信亨氏は「その本質が定まらない」と批判しているが、懐感の『群疑論』の所説をも含めてさらに検討が望まれる。迦才の化土往生説には本願他力による往生という要素がまったく欠落していると言えるのではなからうか。迦才の『浄土論』の論旨は、その題号に示されるように、摂論学派の学説にもとづく仏土論が中心であって、その仏土論の前提となる仏身論、つまり阿弥陀仏論・往生論が説かれていない。

さらに迦才の後輩である懐感の『群疑論』と『浄土論』とを比較すると、両書には23項目にも及ぶ共通課題があると指摘されている。『群疑論』への影響も今後の重要な課題である。これらのうち、迦才の通報化土説に対して、懐感は全面的な賛意を表していないように思われる。

結局、地論学派・摂論学派の心識説にもとづく唯心浄土的な浄土教理解と心外の有相浄土教の立場に立つ道綽・善導の浄土教とのかかわりは、今後より一層の研究を深める必要がある重要な課題であるといえよう。

#### [結語]

以上のように種々の将来的な課題はあるものの、本論文は従来の迦才研究とは、方法論的にも結論的にも大きく一線を画し、中国唐代浄土教研究にさらなる進展をもたらすことが期待されるものであり、また同時に迦才の浄土教の独自性を初めて明確に提示した研究成果として高く評価できるものである。よってここに本論文が博士（甲種・仏教学）に充分値するものと判断し、学位に相当するものと認定するしだいである。